

リーディング・ジャーナルと コア・ジャーナル

「リーディング・ジャーナルに掲載されるような、いい論文を書きなさい。」そんな声が、たとえば教員から院生などにかけられる。ランキングが明確な理系分野では、教員からの叱咤激励をまつまでもなく、それを念頭に若手は研究し、成果を発表しているという。学術雑誌の発行主体も序列に敏感で、ランキングを上げるためにさまざまな試みがあることを漏れ聞いている。細分化した研究分野で、学術雑誌の序列化が進むのは自然なことで、競争が激しい分野ではなおさらそうだろう。

ひるがえって、さまざまな分野からなり、研究対象も研究者や分野によって異なり、使用言語も多様な地域研究の場合、「リーディング・ジャーナル」はあるのだろうか。東南アジア研究に関わる逐次刊行物の情報共有化を進める試みが図書館関係者によってはじまったとき、これらの取り組みのなかから出てきたのが「コア・ジャーナル」という考え方だった。「リーディング」ではなく「コア」というところに、地域研究らしい特色が感じられて好感をもったことを記憶している。東南アジアに関するたくさんの逐次刊行物のなかから「コア」となる雑誌を選定し、その所在情報を共有化することの試みは、地域研究の新しい手法を開発しようとする「地域情報資源共有化プロジェクト」の一環として行われた。

地域に関する情報は多岐にわたる。学術図書・雑誌に加えて一般図書・雑誌も研究の対象とな

る。統計資料や行政文書、新聞等の文字資料はもちろん、地図や写真のような画像、商業映画や調査記録のような映像、さらに音声記録や研究者のフィールドノートまでもが地域理解のための資料となる。プロジェクトでは、こうした大量かつ多様な媒体を対象とした共有プラットフォームを構築するために、地理情報システムや時空間情報処理技術の応用が試みられた。ようやくいくつかの試験的なプラットフォームが作成されるようになり、「地域の知」の蓄積と活用を図ろうとする、さらに包括的な計画も構想されようとしている（日本学術会議地域研究委員会『提言「地域の知」の蓄積と活用に向けて』二〇〇八年七月）。

プロジェクトを進めるなかで、図書館学と情報学の専門家のあいだに、どうも「溝」があるなど感じたことがあった。「コア」などを選ぶ、すべての雑誌を情報として網羅するというアイデアが情報学の側にあった。一方、図書館の側には、館に収蔵するためには選別もやむなしという発想があったようだ。「リーディング」ではなく「コア」というのは、たしかにいい表現だったといまも思っている。では、「コア」とは何か。それを突き詰めていくことも重要な課題かもしれない。電子図書館化の動きが加速しているが、そのほかにも研究図書館が取り組むべきさまざまな活動分野があるにちがいない。情報学の専門家が発した問いかけを起点に、地域情報資源の共有化に向けて両者の一層の協働が進むことを期待したい。

たなか こうじ／京都大学次世代研究者育成センター・特任教授

東南アジア研究を専攻。京都大学東南アジア研究所、同地域研究統合情報センターを経て、2010年から、若手研究者支援のための京都大学白眉プロジェクトの運営に携わる。